

世阿弥(ぜあみ)著 小西甚一編訳者「風姿花伝・花鏡」たちばな出版 2012年3月1日刊を読む

## 離見りけん けんの見

1. (1)また、舞に「もくぜんしんご目前心後」ということがある。  
 (2)「目を前につけ、心を後に置け」という意味である。  
 (3)これは、前に述べた舞智の演じかたにおける心がけである。
2. (1)観客席から見る役者の演技は、客体化された自分の姿である。  
 (2)つまり、自分の意識する自己の姿は、我見であって  
 (3)けっして離見で見た自分ではない。
3. (1)離見という態度で見るときには、観客の意識に同化して自分の芸を見るわけであって、  
 (2)そのとき、はじめて自己の姿というものを完全に見きわめることができる。  
 (3)自分の姿を見きわめることができれば、前後左右、どこだって完全に見るわけである。
4. (1)けれども、自分の眼で自分の姿を見れば、目前と左右とだけは見られるが、後姿はわからない。  
 (2)自己の後姿が感じとれなければ、たとえ姿に洗練を欠く点があっても、よくわからない。
5. (1)だから、いつも離見りけん けんの見をもって、観衆と同じ眼で自己の姿をながめ、肉眼では見えない所までも見きわめて、身体ぜんたいの調和した優美な姿を完成しなければならない。  
 (2)そして、これは、すなわち、心を自己の後に置くという次第ではないか。  
 (3)どこまでも、離見りけん けんの見ということをよく理解体得し、「眼は眼自身を見ることができない」筋あいすぢあいを腹に入れて、前後左右を隈なく心眼で捉えるようにせよ。  
 (4)そうすれば、花や玉のように優美な芸の理想境に到達することは、はっきり立証されるであろう。
6. 担板感に「すべて、舞や動作に到るまで、左右前後と破綻のないようにせよ」とある。  
 題目の六箇条、終り。

### 〈原文〉

1. (1)また、舞に、もくぜんしんご目前心後と云ふことあり。  
 (2)「目を前めに見て、心うしろを後に置け」となり。  
 (3)これは、以前申しつるぶちふうたい舞智風体の用心なり。
2. (1)見所けんしよより見る所の風姿は、わがりけん離見なり。

(2)しかれば、わが<sup>まなこ</sup>眼<sup>がけん</sup>の見る所は我見なり。

(3)離見<sup>りけん</sup>の見<sup>けん</sup>にはあらず。

3. (1)離見<sup>りけん</sup>の見<sup>けん</sup>にて見る所は、すなわち見所<sup>けんしよどうしん</sup>同心<sup>けん</sup>の見なり。

(2)その時は、わが姿<sup>けんとく</sup>を見得<sup>けん</sup>するなり。

(3)わが姿<sup>さゆうぜんご</sup>を見得<sup>けん</sup>すれば、左右前後<sup>けん</sup>を見るなり。

4. (1)しかれども、目前<sup>もくぜん</sup>左右<sup>けん</sup>までをば見れども、後<sup>うしろすがた</sup>姿<sup>けん</sup>をばいまだ知らぬか。

(2)後姿<sup>しよく</sup>を覚えねば、姿<sup>けん</sup>の俗<sup>けん</sup>なる所をわきまへず。

5. (1)さるほどに、離見<sup>りけん</sup>の見<sup>けん</sup>にて、見所<sup>けんしよどうけん</sup>同見<sup>けん</sup>となりて、不及<sup>ふきゆうもく</sup>目の身<sup>しんしよ</sup>所<sup>けんち</sup>まで見智<sup>けんち</sup>して、五体<sup>けんち</sup>相応<sup>けんち</sup>の幽姿<sup>ゆうし</sup>をなすべし。

(2)これすなはち、心<sup>けん</sup>を後<sup>うしろ</sup>に置くにてあらずや。

(3)かへすがへす、離見<sup>りけん</sup>の見<sup>けん</sup>をよくよく見得<sup>けん</sup>して、眼<sup>けん</sup>、まなこ<sup>まなこ</sup>を見ぬ所<sup>けん</sup>を覚え<sup>おぼ</sup>て、左右前後<sup>けん</sup>を分明<sup>ふんみよう</sup>に案見<sup>あんけん</sup>せよ。

(4)さだめて花姿<sup>かしぎよくとく</sup>玉得<sup>けん</sup>の幽舞<sup>いた</sup>に至らんこと、目前<sup>もくぜん</sup>の証<sup>しやうけん</sup>見<sup>けん</sup>なるべし。

6. 担板感<sup>たんばんかん</sup>に云はく、「そうじて舞<sup>まい</sup>・働<sup>けん</sup>きに至るまで、左右前後<sup>けん</sup>と納<sup>おさ</sup>むべし。」

題目の六ヶ条、以上。

#### <注釈>

1 離見 (1)我見すなわち主観的な認識のしかたを離れること。

(2)もと禅語である。演者が自分のいま演じている芸を、観客の立場からながめるとい  
うのだから、そのながめられている芸は客体化された自分だといえる。

2 担板感 (1)「感」は「箴<sup>しん</sup>」(いましめ)の誤りか。

(2)ものごとの半面しかわからないことへの戒め。

(3)担板は、板をかつぐと、片方しか見えないことで、偏見の譬え。

P240 ~ 242

#### <コメント>

世阿弥著「風姿花伝・花鏡」で伝えられる、能の舞の奥儀・秘伝「離見の見(りけんのけん)」。小西甚一先生の素晴らしい現代語訳は有難い限りです。世阿弥芸術論の代表作である「風姿花伝」と「花鏡」を小西先生の「現代語訳」と「原文」でじっくり読み込み、「人生の楽しみ」を得て頂きたく存じます。

2021年12月15日 林明夫記